

# 日本人大学生における対人関係領域の アイデンティティにとって重要な他者は誰か？

— 選択された他者別に検討した、アイデンティティ形成の3次元と  
人格、心理社会的問題、親子関係との関連 —

杉村和美・畑野 快<sup>1</sup>・徳岡 大  
西田若葉・佐藤裕樹<sup>2</sup>・保木井啓史<sup>3</sup>

(2013年10月3日受理)

Which Person is Important to Relational Identity in Japanese University Students?  
— Examining associations between identity processes and personality, psychosocial  
problems, and parent-adolescent relationships for different selected persons —

Kazumi Sugimura, Kai Hatano<sup>1</sup>, Masaru Tokuoka,  
Wakaba Nishida, Yuki Sato<sup>2</sup> and Takafumi Hokii<sup>3</sup>

**Abstract:** The Utrecht-Management of Identity Commitments Scale (U-MICS) is a tool for assessing three identity processes (commitment, in-depth exploration, and reconsideration of commitment) in one ideological (educational) and one relational domain. For the Japanese version of U-MICS, concurrent validity has been confirmed in the educational domain, but not in the relational domain. A possible reason was that participants could choose which person to think about when answering items about relational identity on the U-MICS questionnaire. Because associations between relational identity processes and correlates might be different across participants choosing differing persons, theoretically consistent associations were not found in total in the previous study. The present study addressed this by investigating which person is important to relational identity formation in Japanese university students ( $N = 642$ , 48.0% female, mean age = 20.0 years). We first divided participants into four groups according to the person they thought about filling items about relational identity: (a) father, (b) mother, (c) best friend or partner, and (d) sibling or other. We then examined associations between the three relational identity processes and measures of personality, psychosocial problems, and parent-adolescent relationships, by group. Results showed that meaningful associations between all these were found in a group of participants who chose their mother, suggesting that a mother can be the most important frame of reference for relational identity formation in Japanese university students. Implications and suggestions for future research are discussed.

Key words: university students, U-MICS, relational identity, Japanese

キーワード：大学生, U-MICS, 対人関係アイデンティティ, 日本人

---

<sup>1</sup> 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員

<sup>2</sup> 社会医療法人 仁厚会 倉吉病院

<sup>3</sup> 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

## 問題と目的

アイデンティティとは個人の人格的な同一性を意味しており、その感覚は、個人が自分の内部に斉一性と連続性を感じられることと、他者がそれを認めてくれることの、両方の事実の自覚によって成立する(Erikson, 1959)。アイデンティティは、児童期までに重要な他者への同一化などによって構成された様々な自己像を、自分の資質や周囲からの期待などとすり合せながら統合することによって、青年期に形成される。その契機となるのは、職業や価値観といった社会における自分の役割やイデオロギーを選択する作業である。

アイデンティティ形成を検討するために広く用いられてきたのが、Marcia (1966) のアイデンティティ・ステータス・モデルである。このモデルは、アイデンティティの形成プロセスを構成する2つの次元、探求とコミットメントの有無を組み合わせることによって、個人のアイデンティティの状態(ステータス)を達成、モトリアム、早期完了、拡散の4つに分類する。近年、探求とコミットメントをいくつかの側面に分けて、アイデンティティ形成のプロセスをより詳細に見ようとするモデルが提起されている(Crocetti, Rubini, & Meeus, 2008; Luyckx, Goossens, Soenens, & Beyers, 2006)。これらのモデルはMarciaのモデルによって長年集積されてきた知見との接続が可能であり、プロセスを重視する観点からステータスを改めて理解する助けとなる。

この中で、国際的に通用性が高く、世界各国で実証的知見が蓄積されているモデルがアイデンティティ形成の3次元モデルである(Crocetti et al., 2008)。Crocetti et al. (2008)によると、アイデンティティのコミットメントに対する個人の取り組みには3つのプロセスがある。まず、「コミットメント」(commitment)は、青年が発達の様々な領域について行った選択や、そうした選択から引き出される自信を指す。「深い探求」(in-depth exploration)は、青年が現在のコミットメントについて熟考したり、さらなる情報を収集したり、他者と話をしたりする程度を表す。「コミットメントの再考」(reconsideration of commitment)は、青年が現在のコミットメントに満足できず、それを放棄したり、新たなコミットメントを求めることを示す。このように3次元モデルは、青年はコミットメントをいったん形成した後も、それを維持するために熟考したり情報を収集する探求を継続すること、その結果コミットメントを見直して再構成することがあると考えており、アイデンティティ形成のプロセスを3次

元からなるサイクルとして概念化している。

これら3次元を測定する尺度として開発されたのが、ユトレヒト版アイデンティティ・コミットメント・マネジメント尺度(Utrecht-Management of Identity Commitments Scale; 以下U-MICS)である(Crocetti et al., 2008; Crocetti, 2012)。この尺度は、イデオロギー領域(中大学生には教育、社会人には職業)と対人関係領域(主に、中高生には親友、大学生と社会人には重要な他者)におけるコミットメント、深い探求、コミットメントの再考の程度を測定する。現在オランダ版(Crocetti et al., 2008)、イタリア版(Crocetti, Schwartz, Fermanil, & Meeus, 2010)、フランス版(Zimmermann et al., 2012)について信頼性と妥当性が報告されている。このようにU-MICSは、海外で幅広く使用され、知見が蓄積されているため、日本人青年のアイデンティティ形成の特徴を海外の青年と比較しながら明らかにする上で、有力な道具となると考えられる。

日本では、U-MICSの邦訳版であるU-MICSJ (Japanese version of the Utrecht-Management of Identity Commitments Scale)の因子構造、信頼性、併存的妥当性の検討がなされ(畑野・杉村, 印刷中)、教育および対人関係領域それぞれの尺度について因子的妥当性と各尺度の内の一貫性が確認されている。また、教育領域においてコミットメント、深い探求、コミットメントの再考は、人格特性、心理社会的問題、親子関係の諸変数と有意な関連を示し、併存的妥当性も概ね確認された。しかし、対人関係領域では、諸変数との関連について理論的に一貫した結果が得られなかった。その理由として考えられたのは、この領域における回答方法の影響であった。大学生や社会人といった青年期後期以降を対象とする場合、自分にとって重要な他者を選択させ(父親、母親、兄弟/姉妹、親友、恋人、その他)、その他者を想定しながら回答するように求める。畑野・杉村(印刷中)では、対人関係領域のアイデンティティでは、重要な他者との関係性自体ではなく、重要な他者を主体的に選び、責任を持って相手と関わるという大人役割を引き受けているかどうかを問題にする(Grotevant, Thorbecke, & Meyer, 1982)との理論的背景から、選択された他者別にデータを分類した上での分析を行わなかった。

しかしながら、青年期の時期には親密な他者が多様になること(Crocetti, Scignaro, Sica, & Magrin, 2012)、青年期にわたり重要な他者が親から友人、恋人などへと広がること(Coleman & Hendry, 1999)、さらに日本人青年は父親との関係が希薄で母親との結びつきが強いいため、青年期の適応に母親との関係性が

大きく影響することが報告されていることから (Gjerde & Shimizu, 1995), 選択された人物によって回答者のコミットメントに対する意味が異なる可能性がある。この点が影響して、畑野・杉村 (印刷中) では、対人関係領域において諸変数との関連が見られず、妥当性が確認されなかった可能性がある。このような問題を解決するためには、重要な他者別に各次元と諸変数との関連を検討し、他者によって関連のあり方が異なるかどうかを確認し、その差異を明らかにする必要がある。そうすることで、対人関係領域において、青年のアイデンティティ形成に寄与する重要な他者が明らかになると同時に、U-MICSJ の対人関係領域尺度の妥当性を確立するための道筋を明確にすることが可能となる。

そこで本研究では、対人関係領域に焦点を当て、選択された他者別に U-MICSJ の3次元と人格 (自己概念の明確性と人格の5因子)、心理社会的問題 (抑うつと不安)、親子関係 (親への信頼感と親からの心理的統制感) との関連を明らかにすることを目的とする。具体的には、選択された他者別に、アイデンティティ形成に関する理論及び先行研究の知見に基づいて設定された以下の仮説 (畑野・杉村, 印刷中) の検証を行う。

コミットメントは、青年が自らの人生に積極的に関わっていく上での人格的な特性 (特に外向性、誠実性、調和性) や、その結果得られる心理的な適応感と関連する (Kroger & Marcia, 2011; McAdams & Olson, 2010)。また、コミットメントは両親からの自律に対するサポートによって促進される (Grotevant & Cooper, 1986; Meeus, Oosterwegel, & Vollebergh, 2002)。したがって、自己概念の明確性や適応的な人格特性 (特に外向性、誠実性、調和性) と正の関連、抑うつや不安といった心理社会的な問題と負の関連、親との良好な関係性 (信頼感) と正の関連を示すと考えられる。

深い探求は、現在のコミットメントに対する精査を意味する。これは自己概念が明確であることを意味する一方で、現在のコミットメントを疑っており、自己概念が揺らいでいる状態とも言える。そして、深い探求は、他者と積極的に関わりながら新しい情報を探索する態度 (特に外向性、開放性) や、ものごとを追求していく熱心さ (誠実性) と関連があるとされている (Bosma, 1985; McAdams & Olson, 2010)。また、深い探求は、自己概念が揺らいでいるとはいえ、コミットメントを前提とした揺らぎであることから、心理社会的な問題と関連がないとされている (Crocetti et al., 2008)。さらに、深い探求は両親との暖かい関係性

を前提として展開すると指摘されている (Grotevant & Cooper, 1986; Meeus et al., 2002)。これらのことから、深い探求は、自己概念の明確さと関連が見られないか、見られたとしても弱い負の関連、人格特性 (外向性、誠実性、開放性) と正の関連、心理社会的な問題と無相関、両親との信頼感と正の関連を示すと考えられる。

コミットメントの再考は、現在のコミットメントが見直しや再構成によって揺らいだ状態を意味し、その揺らぎから抑うつや不安と関連するとされる (Crocetti et al., 2008)。また、これまでの親との関係や親から勧められた選択に不満を持ち、それを放棄して別の選択を探し求める場合もあるので、親の関与を自律への妨害として強く認識する可能性がある (Grotevant & Cooper, 1986; Kroger, 2004)。これらのことから、自己概念の明確性や適応的な人格特性と負の関連を示し、心理社会的な問題と正の関連、両親からの心理的な統制感と正の関連を示すと考えられる。

## 方 法

### 調査対象者

広島県内・京都府内・大阪府内の18~25歳の大学生693名であった。うち435名は、畑野・杉村 (印刷中) の分析対象者と同一である。ここから年齢、性別、U-MICSJ の回答に不備のあったデータを除いた642名 (男性334名、女性308名、平均年齢20.00歳、 $SD=1.27$ 歳) を分析対象者とした。U-MICSJ における回答不備の基準は、教育領域・対人関係領域のいずれかで尺度単位の回答漏れがあること、対人関係領域で重要な他者を選択していないことであった。

### 手続き

2011年10月~2012年7月に、次項で述べる尺度項目への回答と、調査対象者の性別、年齢、学年の記入を求める質問冊子を、講義終了後に一斉配布し、その場で回収した。扱う項目が多いため、回答者の負担を考慮し、質問冊子を2種類または3種類に分け、いずれにも U-MICSJ が含まれるようにした。実施に当たっては「この調査の回答内容はすべて集団データとして扱い、個人の情報や回答内容が特定されたり、外部に漏れたりすることは一切ありません」と教示し、倫理的配慮を行った。

### 使用尺度

**対人関係アイデンティティ: U-MICSJ** U-MICSJ (畑野・杉村, 印刷中) の対人関係領域の尺度を用いた。この尺度は、コミットメント (5項目)、深い探求 (5項目)、コミットメントの再考 (3項目) の合

計13項目からなる（付録参照）。回答者に重要な他者を6つの選択肢（父親，母親，兄弟／姉妹，親友，恋人，その他）から選択させ，その他者を想定して回答するよう求める。「あてはまらない」～「あてはまる」の5件法評定を求めた。

**自己概念の明確性尺度** 自己概念の明確性尺度 (Self-Concept Clarity Scale; Campbell, Trapnell, Hein, Katz, Lavalle, & Lehman, 1996; 邦訳版は徳永・堀内, 2012) は，自己概念について一貫性を持っているかどうかを測定する12項目からなる。「あてはまらない」～「あてはまる」の5件法評定を求めた。

**人格の5因子尺度** 人格の5因子尺度（和田, 1996）は，「外向性」，「調和性」，「誠実性」，「情緒不安定性」，「開放性」の5因子，各12項目からなる（合計60項目）。「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」の7件法評定を求めた。

**抑うつ：CES-D** CES-D (The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale; Radloff, 1977; 邦訳版は島・鹿野・北村・浅井, 1985) は，調査日までの1週間の心身の状態を尋ねる20項目からなる。「全くそうでない」～「全くそうである」の4件法評定を求めた。

**不安：状態－特性不安検査** 状態－特性不安検査 (STAI: State-Trait Anxiety Inventory; Spielberger, Gorsuch, & Lushene, 1970; 邦訳版は清水・今栄, 1981) は，現在，どの程度不安を感じているかを尋ねる状態不安の20項目，普段一般的に不安をどの程度感

じているかを尋ねる特性不安の20項目，合計40項目からなる。「全くそうでない」～「全くそうである」の4件法評定を求めた。

**両親への信頼感：IPPA** IPPA (Inventory of Parent and Peer Attachment; Armsden & Greenberg, 1987; 邦訳版は高木, 1994) の「信頼感」因子を用いた。9項目からなり，「あてはまらない」～「あてはまる」の5件法評定を求めた。

**両親からの心理的統制感：EICA** 親子関係診断尺度 EICA (辻岡・小高, 1994) の「統制」因子を用いた。両親からの統制感の強さを表す10項目からなる。父親・母親をそれぞれ想定させて別々に回答を求めた。「あてはまらない」～「あてはまる」の5件法評定を求めた。

**分析**

まず，選択された他者が誰であるかによって，対象者の群分けを行った。そして，各群におけるU-MICSJと諸変数との関連を検討するために，群別にU-MICSJの低位尺度（コミットメント，深い探求，コミットメントの再考）と人格（自己概念の明確性，人格の5因子），心理社会的問題（抑うつ，状態・特性不安），親子関係（両親への信頼感，父親・母親からの統制感）との相関係数を算出した。

Table 1 サンプル全体及び各群における各尺度の回答者数(N), 平均値(M)と標準偏差(SD), 得点範囲, α係数

	サンプル全体			父親群			母親群			親友/恋人群			その他群			得点範囲	α
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD		
コミットメント	642	3.68	0.83	142	3.72	0.84	257	3.89	0.74	112	3.50	0.83	131	3.37	0.87	1-5	.79
深い探求	642	3.14	0.91	142	2.93	0.91	257	3.09	0.83	112	3.50	0.91	131	3.15	0.95	1-5	.81
コミットメントの再考	642	3.19	1.03	142	3.18	0.99	257	3.16	0.98	112	3.19	1.08	131	3.28	1.11	1-5	.82
自己概念の明確さ	325	2.99	0.64	71	3.10	0.68	135	2.93	0.58	65	2.94	0.63	54	3.07	0.72	1-5	.76
外向性	302	4.41	1.00	65	4.49	0.95	126	4.37	0.99	41	4.37	0.77	70	4.43	1.17	1-7	.81
誠実性	300	3.81	0.83	65	3.92	0.59	124	3.85	0.87	42	3.62	0.91	69	3.75	0.88	1-7	.79
調和性	303	4.40	0.77	65	4.29	0.74	126	4.45	0.81	43	4.28	0.63	69	4.46	0.80	1-7	.79
情緒不安定性	304	4.59	1.05	65	4.46	0.85	127	4.72	1.11	42	4.79	1.07	70	4.33	1.06	1-7	.90
開放性	300	4.10	0.83	65	4.29	0.77	125	4.07	0.81	42	3.76	0.82	68	4.19	0.90	1-7	.84
抑うつ	332	2.17	0.52	70	2.20	0.50	136	2.15	0.52	64	2.20	0.54	62	2.11	0.55	1-4	.88
状態不安	316	2.46	0.51	66	2.42	0.53	131	2.50	0.50	65	2.46	0.50	54	2.39	0.49	1-4	.72
特性不安	319	2.73	0.56	69	2.72	0.51	133	2.71	0.57	65	2.83	0.60	52	2.65	0.52	1-4	.85
両親への信頼感	324	3.69	0.86	70	3.77	0.80	135	3.86	0.79	66	3.33	1.00	53	3.60	0.82	1-5	.91
父親からの統制感	330	2.03	0.88	70	2.04	0.82	135	1.93	0.86	63	2.19	0.98	62	2.08	0.87	1-5	.92
母親からの統制感	334	2.21	0.91	68	2.19	1.00	138	2.16	0.77	65	2.35	1.01	63	2.19	0.98	1-5	.92

注)各尺度のα係数は全回答者のものである。

## 結果

### 記述統計及び使用尺度の内的一貫性

分析を行うにあたって、サンプル全体について本研究で用いた尺度の平均値、標準偏差、 $\alpha$ 係数を算出した (Table 1)。全ての尺度の  $\alpha$  係数が .70 を越えたため、内的一貫性に問題はないと判断し、そのまま使用した。

### 選択された他者による対象者の群分け

重要な他者として選択された人物及び回答者数は、父親142名、母親257名、兄弟/姉妹35名、親友85名、恋人27名、その他96名であった。その他として記述された人物は、先生、先輩、祖父母など多岐に渡っていた。カイ二乗検定の結果、人物ごとの回答者数に有意な偏りが見られた ( $\chi^2(5) = 333.58, p < .01$ )。Ryanの方法による多重比較を行ったところ、母親を選択した者が最も多く、父親、親友またはその他、兄弟/姉妹または恋人を選択した者が続いた。

父親・母親以外の人物を選択した者が比較的少数であること、質問紙を分冊して実施したために尺度によっては回答者数が少数であったことを考慮して、以後の分析のために群を統合することとした。具体的には、青年期には重要な他者が親から友達や恋人へと広がることから (Coleman & Hendry, 1999)、家庭外での重要な他者という意味で共通する親友群と恋人群を統合した。兄弟/姉妹群と、その他群における多様な人物については、それぞれ単独で群を構成するには人

数が少ないことから、統合することにした。これにより、父親群 (142名)、母親群 (257名)、親友/恋人群 (112名)、その他群 (131名) の4群が構成された。各群における各尺度の回答者数、平均値と標準偏差は Table 1 に示した通りである。

### サンプル全体及び各群における U-MICSJ と諸変数との関連

**サンプル全体** サンプル全体及び各群における U-MICSJ と人格、心理社会的問題、親子関係との相関係数を Table 2 に示した。サンプル全体の結果は、畑野・杉村 (印刷中) の結果とほぼ一致していた。コミットメントは外向性、誠実性、両親への信頼感と正の関連を示していた ( $r = .30, .12, .39$ )。これらの結果は、コミットメントが適応的な人格特性 (外向性、誠実性、調和性)、両親への信頼感と正の関連にあるという仮説を概ね支持する一方で、自己概念の明確さと正の関連、心理社会的問題 (抑うつ、不安) と負の関連にあるという仮説を支持しなかった。深い探求は、外向性、両親への信頼感と正の関連 ( $r = .24, .25$ ) を示し、深い探求が人格特性 (外向性、誠実性、開放性) や両親との信頼感と正の関連にあるという仮説を一部支持していた。コミットメントの再考は、外向性、開放性、状態不安と正の関連 ( $r = .15, .20, .15$ ) を示していた。これらの結果は、コミットメントの再考が自己概念の明確性や適応的な人格特性と負の関連、心理社会的問題や両親からの統制感と正の関連を示すとの仮説のうち、心理社会的問題に関する部分のみ支持し、仮説を

Table 2 サンプル全体および各群におけるU-MICSJ (対人関係領域) と諸変数との相関係数

	人格					心理社会的問題				親子関係		
	自己概念の明確さ	外向性	調和性	誠実性	情緒不安定性	開放性	抑うつ	状態不安	特性不安	両親への信頼感	父親からの統制感	母親からの統制感
サンプル全体 (N = 300-334)												
コミットメント	.01	.30 **	.05	.12 *	-.04	.10	.04	-.01	-.02	.39 **	-.06	.04
深い探求	-.05	.24 **	.03	.07	.02	.07	.09	.08	.02	.25 **	.08	.24
コミットメントの再考	-.06	.15 **	.02	-.01	-.08	.20 **	-.05	.15 **	.00	.10	.07	.09
父親群 (N = 65-71)												
コミットメント	.21	.37 **	-.13	.11	.21	.18	.07	-.06	-.21	.57 **	.02	.29 *
深い探求	.11	.41 **	.12	.12	.01	.09	.26 *	.01	-.28 *	.40 **	.00	.21
コミットメントの再考	-.23	.33 **	-.07	-.06	.05	.20	.14	.14	-.16	.01	.01	.26 *
母親群 (N = 124-138)												
コミットメント	.10	.34 **	.16	.10	-.24 **	.10	-.08	-.02	.03	.51 **	-.16	-.16
深い探求	-.04	.10	-.05	.12	.10	.08	.03	.10	.10	.41 **	.13	-.05
コミットメントの再考	-.19 *	.01	-.06	-.05	.09	.22 *	-.10	.21 *	.10	.10	.03	-.08
親友/恋人群 (N = 41-66)												
コミットメント	-.22	.39 *	.35 *	.13	-.26	-.08	.20	.12	.16	.14	-.04	-.05
深い探求	-.15	.25	.38 *	.08	.02	-.01	.00	.05	.07	.19	-.03	.04
コミットメントの再考	.18	.15	.14	.21	-.32 *	.25	-.07	.22	.15	.08	.09	.04
その他群 (N = 52-70)												
コミットメント	-.06	.25 *	-.07	.09	.03	.16	.05	-.18	-.21	.14	.13	.22
深い探求	-.17	.35 **	-.03	.07	-.17	.23	.15	.21	.11	.06	.11	-.02
コミットメントの再考	.09	.26 *	.15	-.07	-.33 **	.06	-.12	-.03	-.26	.32 *	.10	.18

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

十分に満たしていなかった。

**父親群** コミットメントは、外向性、両親への信頼感と正の関連を示し ( $r=.37, .57$ )、仮説を一部支持したが、母親からの統制感が正の関連を示していた ( $r=.29$ ) という結果は仮説とは異なっていた。深い探求は、外向性、抑うつ、両親への信頼感と正の関連 ( $r=.41, .26, .40$ )、特性不安と負の関連 ( $r=-.28$ ) を示していた。また、自己概念の明確性と負の関連が見られなかった。これらの結果は、仮説を一部支持する一方で、心理社会的問題と無相関であるとの仮説を支持しないものであった。コミットメントの再考は、外向性、母親からの統制感と正の関連 ( $r=.33, .26$ ) を示していた。これらの結果は、母親からの統制感についてのみ仮説を支持していた。

**母親群** コミットメントは、外向性、両親への信頼感と正の関連 ( $r=.34, .51$ )、情緒不安定性と負の関連 ( $r=-.24$ ) を示していた。また、深い探求は、両親への信頼感と正の関連 ( $r=.41$ )、コミットメントの再考は、自己概念の明確さと負の関連 ( $r=-.19$ )、開放性、状態不安と正の関連 ( $r=.22, .21$ ) を示していた。これらの結果は、アイデンティティ形成の3次元それぞれに関する仮説を、部分的ではあるが大筋で支持するものであった。

**親友/恋人群** コミットメントは外向性及び調和性と正の関連 ( $r=.39, .35$ )、深い探求は調和性と正の関連 ( $r=.38$ )、コミットメントの再考は情緒不安定性と負の関連 ( $r=.32$ ) を示した。これらの結果は、コミットメントについては仮説を一部支持するものであったが、他の2次元については仮説を支持するものではなかった。

**その他群** コミットメントと深い探求は共に、外向性と正の関連 ( $r=.25, .35$ )、コミットメントの再考は、外向性、両親への信頼感と正の関連 ( $r=.26, .32$ )、情緒不安定性と負の関連 ( $r=-.33$ ) を示していた。これらの結果は、コミットメント及び深い探求については仮説を一部支持するものであったが、コミットメントの再考については仮説を支持するものではなかった。

## 考 察

本研究の目的は、選択された他者別に U-MICSJ (対人関係領域) の3次元と人格、心理社会的問題、親子関係との関連を明らかにすることであった。その結果、父親群では、仮説を支持する結果と支持しない結果の両方が示され、親友/恋人群及びその他群では、関連があまり見られず仮説を支持する結果が得られなかつ

た。これに対して母親群では、部分的ではあるものの仮説を大筋で支持する結果が得られた。

以上の結果は、日本人大学生の対人関係領域のアイデンティティ形成において、重要な他者が母親であることを示唆している。母親群の結果は、母親との関係からもたらされる自己や将来に対する自信が適応的な意味を持つことを意味する。また、こうした自信の揺らぎと自己概念の不明確さが結びついていることから、母親との関係へのコミットメントは、それが強まった時よりも弱まった時に自己の感覚に関わってくるといえる。つまり、自己の感覚を根本的なレベルで支えていると考えられる。青年が自立の途上で出会う様々な問題を解決するために、対人関係をどのように利用するかを検討した研究によれば、発達に伴い両親より友達に頼るようになることが見いだされている一方で、家庭の中では母親が最も重要であることを示している (Coleman & Hendry, 1999)。また、日本人青年が家庭の中で母親と強く結びついており、そのあり方が青年の適応を規定することが指摘されている (Gjerde & Shimizu, 1995)。本研究の対象者が母親を最も多く選択したことから、母親との関係へのコミットメントが適応に重要な意味を持つことは、こうした見解と一致する。

母親群に対して父親群の結果は、父親との関係へのコミットメントが必ずしも適応的な意味を持つとは限らない可能性を示している。特に、コミットメントと母親からの統制感が関連していたことは、母親との関係が良好でないために父親との関係を強めている可能性を伺わせる。また、深い探求が抑うつと正の関連、特性不安と負の関連を示すという一貫しない結果は、コミットメントを精査することがアイデンティティを維持するのか弱体化させるのか、必ずしも明確ではないことを意味する。また、親友/恋人群及びその他群の結果は、コミットメントの意味を十分に明らかにするものではなかった。このように母親群以外の結果は、理論的に想定された方向とは異なる結果を多分に含んでいたために、サンプル全体での諸変数の関連が希薄化したと考えられる。

以上のように、本研究からは、日本人大学生の対人関係領域のアイデンティティにおいて母親が従来のアイデンティティ形成の仮説に当てはまること、父親は異なった関係を示す可能性が示された。これまで、日本でアイデンティティ形成における他者の観点、とりわけ重要な他者に則したアイデンティティ形成が検討されてこなかった現状からすると、本研究の知見は、大学生の対人関係領域におけるアイデンティティ形成の道筋を検討する上での端緒を開いたと言えるだろ

日本人大学生における対人関係領域のアイデンティティにとって重要な他者は誰か？

一選択された他者別に検討した、アイデンティティ形成の3次元と人格、心理社会的問題、親子関係との関連—

う。加えて、これらの結果は、U-MICSJの対人関係領域の妥当性を検討する上での一助になったと言える。

しかしながら課題も残されている。まず、選択された人物によって諸変数の関連のあり方が異なっていたことから、人物を選択させる方式を取る際には慎重になる必要がある。青年期以降には重要な他者が多様化することが指摘されているものの (Crocetti et al., 2012), その実証的知見は十分に蓄積されているわけではない。本研究においても、仮説を支持する結果と支持しない結果が得られたことから、今後は探索的な実証研究をさらに積み上げると同時に、仮説の生成を行っていく必要があると考えられる。次に、調査対象者の問題である。本研究では、概ね回答者が父親と母親に偏り、親友及び恋人の群の調査対象者が比較的少数となってしまった。調査対象者の数が限られていたことから、分析結果が十分でなかった可能性がある。今後は、調査対象者を十分に確保した上で、分析を行うことが求められる。最後に、他のアイデンティティ尺度を用いて U-MICSJ の構成概念妥当性を検討することである。その際、中高生版で用いられている親友と本研究で重要性が見いだされた母親の両方を取り上げ、青年期の幅広い年代を対象に、各人物との関係へのコミットメントがアイデンティティの感覚を十分に意味するかどうかを確認する必要がある。以上の課題に取り組むことで、今後 U-MICSJ の妥当性が確立され、欧米諸国と日本のデータの比較検討が可能になるとともに、日本人青年のアイデンティティ形成の特徴が明らかになることが期待される。

## 付録：U-MICSJ 対人関係領域

今、あなたの人生であなたが参考になっている、一番重要な人はだれですか。以下の6つから1つ選んで、その番号を○で囲んでください。

- 1 父親 2 母親 3 兄弟 / 姉妹 4 親友 5 恋人  
6 その他 (具体的に書いてください)

上であなたが選んだ人を思い浮かべたとき、次の文章はあなたにどのくらいあてはまりますか。最もあてはまるものの番号を○で囲んでください。

- (1) この人は私に、人生における安心を与えてくれる
- (2) この人は私に自信を与える
- (3) この人は私に、私が私であるという確信を感じさせる
- (4) この人は私に、将来の保障を与える
- (5) この人は私に、将来について楽観的に考えさせ

てくれる

- (6) 私はこの人について多くのことを知ろうとしている
- (7) 私はこの人のことをよく考える
- (8) 私は、この人について新しいことを知ろうととも努力している
- (9) 私はよく、他の人がこの人についてどう思っているのかを知ろうとしている
- (10) 私はこの人のことについて、他の人とよく話す
- (11) 私はよく、自分の参考となるような、新たな人を見つけるようにした方がよいと考える
- (12) 私はよく、新たに自分の参考となるような人が、自分の人生をもっと興味深くしてくれるだろうと考える
- (13) 実際、私は自分の参考となるような新たな人を探している

注) (1)~(5)はコミットメント、(6)~(10)は深い探求、(11)~(13)はコミットメントの再考の項目である。

## 【引用文献】

- Armsden, G. C., & Greenberg, M. T. (1987). The inventory of parent and peer attachment: Individual differences and their relationship to psychological well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 427-454.
- Bosma, H. A. (1985). *Identity development: Coping with commitments*. Groningen, The Netherlands: University of Groningen.
- Bosma, H. A., & Kunnen, E. S. (2001). Determinants and mechanisms in ego identity development: A review and synthesis. *Developmental Review*, 21, 39-66.
- Campbell, J. D., Trapnell, P. D., Hein, S. J., Katz, I. M., Lavelle, L. F., & Lehman, D. R. (1996). Self-concept clarity: Measurement, personality correlates, and cultural boundaries. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 141-156.
- Coleman, J. C., & Hendry, L. B. (1999). *The nature of adolescence* (3rd ed.). London: Routledge. (白井利明他 (訳) (2003). 青年期の本質 ミネルヴァ書房)
- Crocetti, E. (2012). The Utrecht-Management of Identity Commitments Scale (U-MICS). Utrecht, the Netherlands: Utrecht University, Research Centre Adolescent Development.
- Crocetti, E., Rubini, M., & Meeus, W. (2008).

- Capturing the dynamics of identity formation in various ethnic groups: Development and validation of a three-dimensional model. *Journal of Adolescence*, **31**, 207-222.
- Crocetti, E., Schwartz, S. J., Fermanil, A., & Meeus, W. (2010). The Utrecht-Management of Identity Commitments Scale (U-MICS) Italian Validation and Cross-National Comparisons. *European Journal of Psychological Assessment*, **26**, 172-186.
- Crocetti, E., Scrignaro, M., Sica, L. S., & Magrin, M. E. (2012). Correlates of identity configurations: Three studies with adolescent and emerging adult cohorts. *Journal of Youth and Adolescence*, **41**, 732-748.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle. Psychological issues Vol. 1, No.1, Monograph 1*. New York: International University Press. (西平直・中島由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Gjerde, P., & Shimizu, H. (1995). Family relationships and adolescent development in Japan. *Journal of Research on Adolescence*, **5**, 281-318.
- Grotevant, H. D., & Cooper, C. R. (1986). Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. *Human Development*, **29**, 82-100.
- Grotevant, H. D., Thorbecke, W., & Meyer, M. L. (1982). An extension of Marcia's Identity Status Interview into the interpersonal domain. *Journal of Youth and Adolescence*, **11**, 33-47.
- 畑野 快・杉村和美 (印刷中) 日本人大学生における日本版アイデンティティ・コミットメント・マネジメント尺度 (Japanese version of the Utrecht-Management of Identity Commitments Scale: U-MICSJ) の因子構造, 信頼性, 併存的妥当性の検討 青年心理学研究
- Kroger, J. (2004). *Identity in adolescence: The balance between self and other* (3rd ed.). Hove, England: Routledge.
- Kroger, J., & Marcia, J. E. (2011). The identity statuses: Origins, meanings, and interpretations. In S. J. Schwartz, K. Luyckx, & V. L. Vignoles (Eds.), *Handbook of identity theory and research, Vol. 1*. (pp. 31-53). New York: Springer.
- Luyckx, K., Goossens, L., Soenens, B., & Beyers, W. (2006). Unpacking commitment and exploration: Preliminary validation of an integrative model of late adolescent identity formation. *Journal of Adolescence*, **29**, 361-378.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- McAdams, D. P., & Olson, B. D. (2010). Personality development: Continuity and change over the life course. *Annual Review of Psychology*, **61**, 517-542.
- Meeus, W., Oosterwegel, A., & Vollebergh, W. (2002). Parental and peer attachment and identity development in adolescence. *Journal of Adolescence*, **25**, 93-106.
- Radloff, L. (1977). The CES-D scale: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, **1**, 385-401.
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, **27**, 717-723.
- 清水秀美・今栄国春 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, **29**, 62-67.
- Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushene, R. E. (1970). *Manual for state-trait anxiety inventory (Self-Evaluation questionnaire)*. Palo Alto, California: Consulting Psychologist Press.
- 高木信子 (1994). 青年期危機と愛着の諸相に関する基礎的研究 関西学院大学文学部教育学科研究年報, **20**, 43-55.
- 徳永侑子・堀内 孝 (2012). 邦訳版自己概念の明確性尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, **20**, 193-203.
- 辻岡美延・小高 恵 (1994). 小・中・高校生における親子関係の認知構造の発達 関西大学社会学部紀要, **26**, 65-84.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.
- Zimmermann, G., Mahaim, E. B., Mantzouranis, G., Genoud, P. A., & Crocetti, E. (2012). The Identity Style Inventory (ISI-3) and the Utrecht-Management of Identity Commitments Scale (U-MICS): Factor structure, reliability, and convergent validity in French-speaking university students. *Journal of Adolescence*, **35**, 461-465.

日本人大学生における対人関係領域のアイデンティティにとって重要な他者は誰か？  
— 選択された他者別に検討した、アイデンティティ形成の3次元と人格、心理社会的問題、親子関係との関連 —

## 付 記

本研究は、平成24年度科学研究費補助金基盤研究（C）「比較文化的視点から見た日本人青年のアイデンティティ形成」（研究代表者：杉村和美，課題番号：24530823）の助成を受けて行われた。調査の実施にあたり、森永康子先生、塚脇涼太先生、平山朋子先生、徳永侑子さんにお世話になりましたことを深く感謝します。